

「東京新聞」の「平和の俳句」、10月掲載の句から。「否という自由ありけり夏の果て 田中亜紀子（46歳）」<黒田杏子 「否」という自由。これは守らねばなりません。絶対にね。> <いとうせいこう メッセージがきちんと俳句になる好例。夏疲れがあっても否は否。> 「否」という抵抗権を認めることは民主主義の基本である。米国の文化は自由の尊重と多人種の集まりで、常に対抗勢力を生み出してきた。トランプ大統領は「否」と言う者を切り捨てているが、米国の持つ活力を喪失させるであろう。北朝鮮の金正恩は「否」を全く認めない。ロシアのプーチン、中国の習近平も「否」を押し殺している。日本の政治も「否」を言い難くなってきた。「否」にも真実があるのではないかと問う寛容さが、時代を生き生きさせるのである。

「銃口を向けた敵にも家族いる 前田裕二（77歳）」<黒田杏子 おっしゃる通りです。映像的なこの一行の迫力はすごいです。家族という二文字をこの俳句の中であらためて深く味わいました。> 私は野田正彰氏の著作から「中国帰還者連絡会」を知った。シベリアに抑留された者の中から千人弱の人が中国の撫順管理所に連れ戻された。周恩来の命令で、極めて人道的な待遇を受けた。彼らは中国戦線で、何をしたかを考えさせられた。戦争は人を獣にするが、人道的な管理所で人間の心を取り戻していった。三光作戦（奪い尽くし、焼き尽くし、殺し尽くす）の実態を、身もだえしながら告白した。その告白は残酷そのものである。罪の重さに耐えきれず自殺した人もいたが、全員が特赦を受け、帰国を許された。彼らの罪責告白は殺した中国人も自分たちと同じように愛する家族がいることを知った時であったという。帰国した彼らは「中国帰還者連絡会」を形成し、戦争の実態を語り、日中友好と反戦、平和を訴えた。彼らは高齢化し、獣が人間に生まれ変わった「撫順の奇跡を伝える会」として継承されている。銃口を向けた敵にも家族がいるのである。この認識が平和を作り出すのではないか。

「ヒドすぎて言葉も出ない史実知る 永田敬子（45歳）」<いとうせいこう 戦時の記録が次々に報道され、内実が明らかになっている。そのように過去を検証するのが歴史というものだ。知ること。> 中国帰還者連絡会の告白は残酷非道そのものである。殊に、おぞましい強姦に関する告白には驚愕、絶句した。

「戦渦（せんか）生き父母に代わりて物申す 本東信子（72歳）」<黒田杏子 「戦争の渦」を生き、この世にはもう居（お）られないご両親。お二人の分も存分に発言してください。> <いとうせいこう ご両親は戦争を体験し、次の「戦前」を知らずに亡くなった。そのかわりを。> 戦争体験者だけが反戦、平和を語れるのではない。戦渦は知らなくても、父母の言葉を継承し、平和を作るための十分な言葉を持ち、発信できる。上記の3句は繋がった句として、心を打たれた。

「空襲警報へ変わるなJ・アラートよ 長瀬元男侯（もとひこ）（82歳）」<黒田杏子 空襲警報を体験した人たちが減ってゆきます。二度と要りませんあの警報は。> <いとうせいこう 大本營の恣意（しい）的な情報がまたぞろ日本中を騒がせている。英語の陰で。> 北朝鮮のミサイルが日本の上空500kmを飛び越えて行った。その後、J・アラートを鳴らし、身を守れと宣伝し、電車を止める。麻生太郎副総理は「北朝鮮のお陰で、自民党は選挙に勝った」と言った。対外的な緊張を煽って問題をはぐらかし、権力を集中させるやり方は世の常である。騙されないように目を覚ましていよう。